

福岡地方の地理的事實

金 尾 宗 平

(一) 姪ノ濱小戸海岸の著しき沈降現象、(二) 殘島の地質地形と人文、(三) 奈多の海屋と海ノ中道の成因、(四) 今津方面の海岸地形の變化と人文、(五) 宗像大島の海岸段丘と人文、(六) 春振山塊北側の階段斷層、(七) 平尾のカルスト臺地と千佛大石洞、(八) 縣下四十ヶ所に近き構造的な鑛泉、最近暇々に實地觀察を行つたものの中、是非一般に紹介して研究指導を仰ぎ度いと思ふもの丈に就いて略述する。讀者は五萬分の一地形圖福岡、春振山、後藤寺、前原、濱崎、津屋崎の六葉、廿萬分の一帝國圖小倉、雜用海圖の福岡灣、宗像大島の二葉廿萬分の一地質福岡圖幅を参照せられん事を乞ふ

一

福岡の西六軒姪濱の北岸、第三紀芦屋層の海崖は廿米内外の裸の絶壁をなして略東西に走つて居る、斷層崖だと云ふ人もある、其の西端妙見岬の附近には傳説で名ある小戸の宮や御膳立の奇勝がある。後者は此邊一帯に發達せる海崖下のプラットホームに現はれてゐる傾斜層(砂岩)

の硬軟から生じた凹凸形である。(奇礁長さ三十米幅九米、内に凹凸なる所二十にも餘り恰も膳碗を配列せるが如く、神功皇后の遺跡と傳ふ)博多灣岸が著しい隆起海岸である事は、古地圖と對照する迄もなく濱堤列やポケット海岸や元寇防壘の場所などでも明かだが、尙ほ此邊十米内外の崖上にある海蝕痕や連撃島の存在でも確である。

所が不思議な事には小戸ノ鼻を西南に廻つた所の小灣の周圍には著しい最近沈降の證據が數々あるのに驚く、先づ東南側の渚を見ると、可成太い樹の株が澤山海の中に隠顯して居る。元の松林であつたらしい砂の上にもある。防壘の址かは疑問だが角石が石垣の崩れた後の様にゴロ／＼重つて水際にあるのもある、尙ほ南や北

側を見ても次第に地盤が崩れ行つてゐるのが見える。松の樹なども生きた儘次第に海水に浸りつゝある、老人の話では御膳立の景色も近來は水面に前ほど岩が顯れないのでつまらないと云つてゐる。

斯る現象は屢地震の際にもある事ながら、此地方の如く全くそれ以外の原因に依るものは我國では比較的珍らしい事と思ふ斯る局部的沈降を地方人は姪濱乃至小戸炭坑の爲めの陷落と考へ、最近少くとも一米半は下つたと云つて居る

二

残ノ島は博多の西六軒、姪濱の北二軒半、福岡灣の關門に當る爲め、幾多價值ある史實を有つ。神功皇后御歸國の際異國の永久降伏を祈願し給ひ、住吉大神の神靈を残させられしに依り其の名起ると傳ふ。地質は圖の如く小島(○、三方里)に不似合位多種複雑で九大などでは地質の標本室と呼んで居るごか云ふ。南部に於いては古生層の角閃片岩雲母片岩は互層して北六十度東の走向に北西七十度の傾斜を有し、それ

を不整合に第三紀の圓礫岩(青屋層)が蔽ふて居る圓礫岩は硬質の爲め東城・北浦などの小尖角をなす、島の北部は古生層を破つて廣範に亙る花崗岩から成り、更に頂上は古生層を貫いて一面に噴出した玄武岩で出来て居る、爲めに地形は約百五十米内外のメーサをなし、南側を除く外の海岸は壯年期の海蝕崖を現はし、そこには頂上からの玄武岩塊が落下壘積して居る。

西方白島の南から東北・北浦の北方(古生層と第三紀との境界)にかけては著しい斷層があつて南に一段下つて居る、隨つて島の南側は緩傾斜となり溪流もあり飲料水も出る、又ファンやテラスで狭いながら階段狀の耕地が發達し江ノ口、東、西、などの聚落(漁村)も出来て居る尙ほ此邊が都合のよい事は、玄海灘から南東に流入する潮流(沿岸流をも含む)は濱崎を中心に可成廣い沖積砂洲を作つて魚の干場等を與え夏の海水浴場となる、因にそこのカスブは流れの對立で出来たものらしい。

島の周圍には暗礁及び小嶼が多い、象瀨(立

岩とも云ひ高さ十七米周圍九十米）は西北二百米の海中にある玄武岩のスタックで、本島にあるものの如く板状のものと異り、全く柱狀節理のものでそこに海蝕洞窟は生じ、海水の出入する毎に怒聲を發して壯觀寧ろ芥屋の大門を凌ぐものがある。尙ほその南側には地下から花崗岩片をもぎ上げて來たと思はれる白色の岩片も混じた凝灰岩集塊岩の部分もあつて特殊な侵蝕景を現はしてゐる。

位置（地方との交通上）地形地質等の關係の外に冬期の西卓越風の事もあつて、島の百五十余个（一千九十九人—大正十五年現在）の殆んど全部は南方に聚落を作つて居る。水田はあるが水利に不便で溜池に依るも猶ほ旱害多く、畑作も耕地の關係上多くを望めず、主業は全く位置の利便で漁業にある。而して其の取引市場は最も交通上に密關せる姪濱との事、副業としては苦の製造、砂利（玄武岩）の採取等で生活程度は高い方ではない、將來大福岡の發展と共に益々交通も便となり夏の遊覽地として繁昌するものと思

はれる。

三

略々北東から南西へ十二籽に亙る海ノ中道の成因に關しては諸説あつて未だ定まらぬが、博多灣の陷落に際し恰も南に名島、荒津、愛宕、姪濱等第三紀丘陵の陸繋島がある如く、北にも磯崎鼻、黒前山、奈多山、鹽屋岬、大岳等の第三紀丘陵が飛石の如く殘存せしに相違なくそれが遂に一連の半島（複陸繋島）となり尙ほ志賀ノ島とも將に接續せんとしてゐるものである。事丈は何人にも異論はなからうと思ふ。志賀ノ島の東側には南北の斷層線があつて相當海も深く、他の如く容易に連繫する事を得ず、今に大干潮の際のみ辛じて徒渉し得る位である。

問題は如何にして殘離島が複合陸繋したかにある、南側は博多灣の沿岸流が北上西歸する際に、南岸の河口邊で得た土砂を次第に運搬堆積せしめる爲め、海岸は南に漸進するを考へて差支なく、之れが又事實である。然るに北側に關しては、或ひは『北東から南西に向ふ流れの爲

めに磯崎鼻乃至奈多の北岸は次第に削られて、其の土砂を西南方中ノ濱白濱等に附着せしめて半島を成立させたものだ』と云ひ或ひは『北側は對馬暖流と共に沿岸にも南西から北東に進む流れがあつて、奈多の北岸乃至磯崎ノ鼻等はこれがために漸次退却するのみである』と云ふ。

筆者は其の何れが眞なるやを確める爲めに數回奈多の海崖に足を運び、古老漁夫等に就いても調査し尙ほ志賀ノ島、道切等にも足を運んだ。

其の中奈多の海崖(廿米内外の懸崖、基底は第三紀層で上に新しい砂層がかぶり、最上部は現在の砂丘に續く)で觀察したものが一番此問題を解決するのに價值があつた、即ち崖下の濱には漁船が着く關係や砂留の爲めの波止堰堤が五ヶ所に築設されてゐるがこれは明治廿六年から三十二年迄七ヶ年の繼續工事として施され、一ヶ所に付き一千六百圓の費用を要し、當時奈多浦の取締小堀安十郎氏が其の主任となり大いに力を盡したもので記念碑迄建てある其の形は海崖の眞下から海岸線に直角に海中に出で、而

も何れも南西に向つて其の先端を屈曲させてゐる。

何んの爲めに先端を曲げるのか、又何んの故に南西に曲げたのか、既にこれ丈で此邊の土砂は何れから何れに漂流するものであるか、隨つて沿岸流は主として何れに流れつゝあるかを推察する事が出来る、尙ほ念の爲め數人の漁夫に潮流の事を聞いたが、北東に差上り南西に引下る其の勢は互角だと云ふ、對馬海流が北東に向ふから沿岸にも此流があると考へるのはどんなものか。

沿岸に働をする(堆積又は侵蝕の)主なるものは沿岸流で、こは他の關係もあらうが主として其の地の卓越風に支配されるもので、奈多地方の如くそれが主として漁夫の云ふ北風である場合には 風 → 海岸線との關係上西南流を起すものではなからうか。

何れにしても大金を投じて折角造つた砂留築堤を土砂の流れ込むのに都合の好い方にオープンさせて、一刻も早く埋つて仕舞ふ様に波止堰

としても砂留としても役に立たぬ事になるやうにと設計する者も居まいから、これで判斷しても前記兩説の中では筆者は前説に賛成するものである。

四

博多灣と唐津灣との間に突出せる糸島半島は過去の怡土・志摩の兩郡が合併せるが如く、此半島は一大陸繫島で、西、深江灣から東今津灣にかけては往古の海峡と思はれる一大凹地帯がある、地溝帯だと云ふ人がある、我國内側地震帯の西端近くに當り北九州では珍らしい可成大さい(明治卅一年)地震があつた事がある。

此糸島海峡とも稱すべき古代地理に就いては議論がある、喜田博士著讀史百話中の『筑前糸島郡の地變』の中には『古く魏の使者の九州に來りたる際は云ふに及ばず、奈良朝の頃吉備眞備が怡土城を築きて太宰府の前衛とし、こゝに戌軍を置きし時より降りて寛仁三年刀伊の賊侵入の際までも、博多より唐津に至るに怡土郡と志摩郡との間を自由に船舶の通航せしことほゞ

推察せらるゝなり』として弘安頃迄も海峡の存在せし事を述べて居られるが、中山博士はこれに反對して志摩郡が島であつた時代は甚だ古き前世の事で、此海峡が埋れて今日の如くなるには非常な長年月を要して居ると云はれて居る。

何れにしても海峡のあつた事丈は地形河系を見ても地名から判斷しても確である、今天和二年(二百三十余年前)の古地圖を見るに往古の海峡と思はるゝ平地西端に於ては、灣が現今より更に深く前原近傍に迄灣入し、又東は今津の入江が頗る大で太郎丸附近に達して居ると中山博士は云つて居られる、今の今津の入江は天然の外に徳川時代に大部人工に依つても埋立られたものらしい。

過去の離島であつた志摩の部も地形から觀察すれば更に數多の小島が連繫したものだと思はれる、今津の入江の南北に對立する今山、毘沙門山などもそれである、今山は八十六米の小丘だが、地質地形上玄武岩のトロイデに屬し先史時代の石器の製造場所だつたと云ふ、頂上には節

理に従つて崩壊した石海がある、眺望實に佳。山の東北麓には縣土木課の事業たる大仕掛の採石場がある、百五十人からの人夫は玄武岩を掘崩すやら、これを機械で破碎するやら、運び出すやら様々の仕事をやつて居る、これが縣下各地に馬車又は船で運搬されて路面に播かられるのである、同じ山の石も時代に依つてそれ／＼利用の方面が變つて行くのも面白い事である、而も何れの場合でも其の石の堅緻と云ふ特質を利用せる點では少しも變りはない。

此附近には老年性の街道町今宿や、貧弱な渡頭の町横濱などがある、北側の濱崎からは沿岸流の爲め生じた、長さ三百七十米許りの、一條の磯嘴^{ブルビット}が突き出て居て、入江の防波堤となつて居る。今津の入江は水淺く而も干潮の際は一路の河と化し、今は船舶の出入には甚だ不便で海苔栽培場の觀があるが昔鎌倉時代は海水相當深く(船の小さかつた關係もあらうが)内外船舶の定礎所だつたのである。

當時の今津(今の津、即ち新湊或は新開港場

の意で元來は和名抄にもある通り登志郷である)は博多(湊淺せて)に代り天下の一大對外貿易港となり、文化の大中心地となり且つ軍事上の要地であつた譯である。

東北毘沙門岳(二百余米)の頂上には古生層を貫いて噴出せる玄武岩塊の柱狀節理をなせるものがある(沖の柱島大小机島等も玄武岩)北側は急傾斜を以て海に臨み、西のスバーを下れば途中蛇紋岩の露出を見るべく、更に下れば遂に長濱の松原に出る、北九州海岸の特徴たるボケットはこゝにも最新の隆起を物語つて居る。幅四百米からの砂濱には矢張三段位の砂丘列がある。その最新のものの上には有名な元寇の防壘が立派に掘り出されて居る、こゝには記念碑もある。

山の南麓には七百年の昔誓願寺の大伽藍を中心に、村の中央に残れる仁王門を正面とし左右に居並ぶ四十二坊の盛時(榮西が宋から禪宗を傳へたのは此地)を僅かに忍ばす大泉坊(國寶がある)のみがある、然し今の今津も普通の聚

落と事變りごとなく支那喫い所がある、聚落の形態構造なども近畿地方に多い垣内式に似て居る様に思はれる。

五

福岡の北東約卅軒の所に東郷と云ふ小驛がある、そこから北へ七軒許り行くと神ノ湊の漁村に出る。此所の突角を中心として東西に相似形な海岸地形が開展されて、恰も洋傘の縁の様になつて居る、骨に當る處には東に鐘ノ岬、中に草崎、西に津屋崎があり、各の先端には地ノ

島、勝島、渡島があつて、渡は既に陸に繋がつて居る、地島と鐘ノ岬との間には長い海底磯嘴があつて將來の地形を想像させる、骨の影にはそれ／＼漁港が發達し布に當る處の弓狀濱には縣下では珍らしい位な大きな砂丘が連つて天然の防波堤となつて居る、近來その砂丘の内側斜面を桑畑に利用して養蠶業を興して居る事も人文地理上見落せない。

神ノ湊の沖六軒の所に有名な宗像中津宮の在す大島(十六方軒)が横はつて居て、南の前記二

島二岬と共に橢圓形の海(宗像の好漁場陥落に困るか)を抱く、日本海大海戦で有名な沖ノ島(玄武岩の孤島、十月末から四月迄は大島人が常に七・八十人此地を根據に漁し四月末から六月末迄は琉球糸満人が十五人位來島して漁業に従事す)は大島村に屬し、其の近海は大島漁業組合の專用漁場である、全島殆んど玢岩より成り僅かに東岸に閃綠岩、南部に中生層がある位で、随つて風化侵蝕に抵抗して割合に高峻な山をなす。

谷内川、岩瀬川の一線で低地の北東部と高地の南西部とに別れる、御嶽(二一七米)からの輻射狀河川は海岸近くで多くは基盤に喰込んで幼年の谷を蛇行して流れて居る、中津宮の横を流れる天ノ川は其の典型である、河下には崖錐や扇狀地で緩傾地を作つて居る所もある。

海岸は既して不斷の波蝕の爲め海崖著しく發達し壯年の地形をなす、低岸は僅かに東部の海岸、中津宮の附近より宮崎邊に至る砂濱、岩瀬附近の磯濱等に過ぎぬ、東部海岸の波止場附近

一帯は節理に沿つて著しく海蝕を受け、幾多の暗礁・顯礁は海岸から數軒の沖に迄存在する、過去の大島が相當今より大きかつた事も想像がつく。

次に北九州一帯の海岸が概して第三紀以來二回の沈降と二回の隆起とを起し、現在はその二回目の隆起時代であると云ふ事は人のよく口にする所で、最近著しい隆起を起して居る事の證據は相當に多い、殊に宗像の海岸地方にはそれが著しい(何れ稿を更めて述べる考)

神ノ湊から船で將に此島に着かんとする時に向ふを眺めると、誰しも氣の付く事は急傾斜の山、山麓の十五米内外の水平な臺地、臺地下の砂濱海岸の海蝕棚、顯礁・暗礁の存在と云ふ風に順次低下した規則的な自然景の目に入る事である。而して急斜面の上半は松杉の深林、下半は雜木乃至柴山、臺地は悉く耕地、其の開析された低部は水田、殘部は畑(桑を相當植ゑてゐる)崖下の砂濱の奥には海岸線に併行して本村の半農半漁の聚落が發達して居る。どうしても筆

者には此臺地を海蝕に因るものとしか斷定出来なかつた、御嶽を越えて北側の海岸に出る、神崎鼻には新設(大正十五年十一月)の玄海大島燈臺―白色、アセチレン、四万燭光十九・五海里―がある。

附近は壯年の海崖、そこに溪流が注ぐ部分丈谷を作る、谷の海への出口へ行つて見ると玢岩の上に第三紀の砂岩礫岩がかぶさつて在る、そこには立派な海蝕崖があり、崖の平潮面上十米内外の所にも海蝕痕が明かにある、二米位の所には浮石が段々ころんでゐる、火山地方から漂着したものだらう、崖下には一大海蝕棚がある、尙は隆起の跡は岩瀬の邊でも見られる。

宗像地方では各町村共男に比し女の數が多い(筑豊・炭田地方と福岡地方との中間地域を占めてゐるので男は稼に澤山出る)のに此島丈は反對である、色々調査して見ると、人口過剩、食糧不足、等の關係から古來どんな身分のある人の子女でも、必ず一度は奉公に行くと云ふ美風のある事がわかつた。地方の(本陸)の方へどん

娘は出嫁に出る、奉公人の給料米や給金が島の經濟を助ける事は非常なものだ云ふ。

六

所謂筑紫山脈(古代山脈)は幾多の^{プロツク}地塊に分れて飛驒山脈などの如く連續せる山脈に非ざる事は人のよく知る所であるが、其の中の脊振山塊に就いては『東西に走る山脈』と書ける地理書が多く又云つたり思つたりして居る人が相當ある様であるが、それは極大ざつばに眺めた時の事で、今地形圖に就いて精細に調査して見ると、北九州の主要構造線たる北西方向に走つて居る事が明かである、御笠川^{ミカサガハ}の地溝帯に大體併行のものと信ずる、勿論それに直角なる北東方向にも支配された部分がある事は言ふ迄もない、最近博多灣に注ぐ各河川の流域地誌を調べて居る中に、谷盆地、鑛泉、古來の交通路等の研究からもヒントを得て、屢々山にも登つて調べて見た結果、どうも脊振の北側には少くとも三箇の北西方向に向ふ地形的斷層線のある事は疑ふ餘地がないと思ふ、即ち脊振山塊は一つの

ステップファウルトであると信ずる、南側も二段になつてゐるらしい。

北側の第一線を、南東から見て行くと、佐賀縣鳥栖^{トリキ}西方の^{ナガバシ}寒水川の谷を上つて七曲峠(五〇三米)を越し那珂川の上流小川内の溪谷から板谷盆地を過ぎ、室見川流域の荒谷を経て椎原盆地に出で、更に石釜曲淵を通り飯場峠を下りて上川原より糸島の中央凹地帶加布里に連るものと見る。此線に沿ふて鑛泉の存在するもの(既に筆者の知れるもの)中央の北綾部八幡社の裏、椎原湯野、加布里犬石の三ヶ所(何れも主として炭酸冷泉)尙ほ寒水川から那珂川の上流にかけては岩脈に沿ふ金鑛脈があつて最近迄稼業して居た、水量の割に寒水川の直線の谷が非常に廣い事、七曲峠が一種の^{ヴァレドク}風溝の地形を有する事(地方人の話)板谷峠から南東に向つた那珂川が七曲峠の北で急に直角以上に曲る事等から河の爭奪を考へる人もある、それは扱て置き脊振は此線で約二百五十米内外北に落ちて南東、石谷山(七四五米)九千部山(八四七米)か

ら小河内山(七〇五米)板谷岳(七四五米)西山(四三〇米)大場山(四五〇米)等は所々の河谷で切られながら一系の山塊をなす、これを假りに九千部山塊と呼べば、この中にも尙ほ併行斷層線を九千部と石谷との間から北西に一ノ岳、小河内岳間に想定する事も出来やう。

次に第二線を鳥栖の北東田代村から車谷を上り河内、苗ヶ尾、黒木を経て室見川上流の脇山盆地に出で、日向峠を越えて高祖川に沿ひ糸島中央回地帯の志登方面に連るものと見る、此線に沿ふては脇山盆地に二ヶ所の鑛泉がある、脇山は標式的な河谷盆地で、恰も甲府のそれに規模これ小さけれ酷似した混扇地形の肥沃な盆地である、これで分離したものは南東に權現山(六二六米)中央に油山(五九二米)西に飯盛(三八九米)高祖(四一六米)の史上に名高き城山がある、この一系を假りに油山山塊と呼ばん、これは急に平野に臨み、百米内外の鴻ノ巣から赤坂の丘陵となり、スパーは遂に福岡城址を経て西公園邇來島に及ぶ。

南・佐賀縣側にも松浦川の谷迄を廣義の脊振山塊と見れば幾條もの北西方向の地形的斷層線を發見する事が出来る、松隈から久保山、井手野、山中線、城原川の線等は其の著しきものである。

地質は殆んど全部が花崗岩なので大した問題はない、脊振山(一〇五五米)獵師ヶ岩山(八九三米)金山(九六七米)等は隆起準平原上に於けるモナードノックと考へられる、脊振は九百米の高臺の上に残れる二百米足らずのかドームである、これは花崗岩の中でも特に石英質に富んだコンバクトのものである爲めに侵蝕に抵抗して残つたものであらう。ドームの上で珪岩質のものを採集したが、或ひはダイクに貫かれてゐるのかも知らん。

脊振の頂上から眺めると佐賀縣側は傾斜が緩で高原狀を呈し、福岡縣側は誠に急傾斜であるのに氣付く、或は北側に階段狀の斷層崖を向けてゐる傾斜地塊かとも思はれる。

兎も角も脊振山塊は一般の考の如く東西に連

ると見るよりも南東から北西に走るものと見るのが學問的で、且つ脊振連嶺（一千米内外）を中心以南に緩斜し北に約二百五十米宛二段の下つたホルストを有する階段状の地塊と見るのを至當とする事を述べたのであるが、茲に今一つ考へなければならぬ事は、脊振山塊（廣義）の中にも前記の主方向に直角の南西から北東に走る支脈を考へ得る事は注意すべき事柄である、例へば九千部山を中心に脊振連嶺と直角に、西に石谷山、東に權現山を連ね、原田のギャップを越えて大根地に續くもの。脊振山から一ノ岳、成竹山を経て牛頸、黒金の兩山に連り天拜山から二日市のギャップを越えて寶滿に至るもの。金山から油山、八丁山から早良糸島兩郡界の飯盛叶嶽に至るもの、雷山、羽金山、浮岳山、十坊山を中心に各南西から北東に亙るもの等は其の著しいものである。

七

縣下には筑紫山脈の走向と一致する地層の配列があつて、石灰岩の如きも主として其の方向

の古生層中に點在して居る、即ち小倉附近（市の東南方）、日豊線新田驛附近、行橋の西約八軒の平尾臺方面、香春町の北香春岳方面、關の山山塊南方の松尾山船尾臺方面、秋月の北、古所山地方、早良の入部村方面から糸島の水無地方へかけて……など各地に亙つてゐる。

隨つてそれ等の地方では或は廣大なカルスト臺地を作つて人文の發達を妨げ、或は石灰岩、大理石の採掘場となり、鑛山の所在地となつて人文上に多大の貢獻を致せるものもある、今それ等の中でカルスト臺地の標式的なものとして平尾臺に就いて路述して見よう。

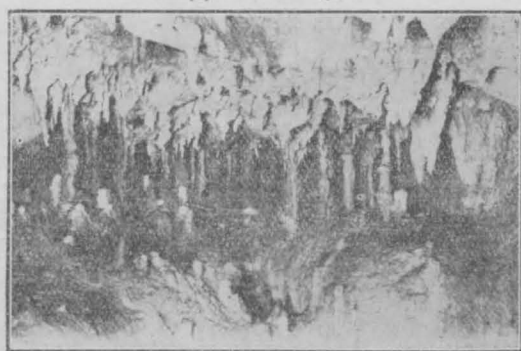
縣下で小規模のカルスト臺地としては前記船尾山から松尾山にかけてのものがある。船尾山は急に傾斜で周圍に臨み、平坦な頂上部には筆者の數へたものでは大小八個のドリーネがあつた尙ほ南方には他の山に續いて二個見えて居る、松尾山にも段々あるらしい、船尾臺のは何れも小規模なまだ幼年のものである、直徑五十米許りの極緩な凹地の中に更に直徑十米深さ八米位

の急傾斜の圓孔のものと、直徑七十米の緩凹地の中に更に二個のドリ―ネが並んで發生し一方は極淺く他方は直徑四十米にも及ぶ所の次第に深き凹地で、珍らしい事には、その中に又直徑二十米深さ九米の、四面を崖で廻らした圓孔のあるものもある、何れも其の下底には粘土（テッラロッサ）と岩塊とがあつて、直徑一米深さ一米半位のボノールがある。

これに較べると平尾臺のは實に大規模なものである、所が此所が要塞地域に入つて居て地形圖がないので世人に全く知られずに居る、臺地は行橋から小倉鐵道石原町驛に通ずる道路の中間にある平尾を中心と東北十二軒東西三軒位に亙る四百米内外の荒漠たる一大臺地である、平尾の聚落の存する臺地（盆地狀）を最低として北に二段の臺地がある、南も少し高い臺地になる平尾盆地は殆んど蔽覆カルストで耕地も廣く水（一箇所の井戸で十七軒の部落は生活してゐる）もある、陸軍の演習用の兵舎もある聚落を西に越すと到る所に壯年末期乃至老年性のドリ―ネ

があつて、そこかしこの噴火口狀の底部丈には耕作がしてある。

北の一段高い臺地には裸のカルストもある、



千佛鐘乳洞内金殿

壘々たる岩塊に取圍まれて深い、壯年期のドリ―ネが無數にある、大部老いて底部を耕地にしたのも南側には少々ある、白衣の行者列の如き所謂墓石地方もある、岩面には

立派なカルレンの彫刻がある、薄く蔽つたテッラロッサの上には茅の如き雜草が一面に生茂つて荒涼たるものである、西に下ると一面に石

灰岩の崖が横に約百米の厚さで並んで居る、其の一部に近頃有名な千佛鐘乳洞が西面して在る埋れて居たのを大石高平氏獨力で開き今も之れを經營してゐるので洞の入口には大石洞と刻んでゐる、入口は低いが入るに従つて天井も高く



千佛鐘乳洞内羅生門

第二圖

天柱の景に到れば、高さ八米にも及ぶ、日暮し天井、空中の達磨、佛手坤岩、金殿、天蓋岩などの名もふさはしく、實に生の儘の鐘乳石で(他の地方の如く荒らされてない)美しい。洞の中からは相當水量の地下水が瀧をなして流れ出て

居る、平尾部落の井戸水と連續してゐると傳ふ)詳細な事は人文地理第三卷参照)。

八

筆者の調査では縣下の鑛泉數は實に卅八箇所に及ぶ、泉質は概して炭酸性のもので、溫度は一般に低い溫度と名の付くものは二日市の武藏(湯町)、筑後河畔の原鶴等の少數に過ぎぬ、何れも火山系のもとはなく今其の分布を検するに南東から北西へ、南西から北東への構造線上特にそれ等の交叉點に多い様でかゝる梨棚式の構造線に支配されたる構造性の鑛泉と斷定する事が出来る、今其の主なるものを表示すれば次の如くである。

泉名	位置	泉質	溫度	岩石
武藏溫泉	筑紫二日市	單純泉	C四六度	花崗岩
(備考 白鳳十二年發見、沿道二十六ヶ所南北ニ排列)				
椎原鑛泉	早良、脇山	同上	二九度	同上
脇田鑛泉	鞍手、吉川	同上	二八度	同上
湯原鑛泉	同上、日吉	同上	二六度	同上
草場鑛泉	粕屋、香椎	弱硫酸泉	一一度	輝岩
則松鑛泉	遠賀洞南	同上	一七度	第三紀砂岩

淺川鑛泉 同上 折尾
 吉井鑛泉 糸島、福吉 單純泉 一五度 花崗岩
 楠田鑛泉 朝倉、杷木 一五度
 東古賀谷鑛泉 八女下妻 單純泉 一七度
 藤田鑛泉 八女、下廣川 同上 一六度

西遊夢錄

(五)

瀧川規一

葛尾 三井、高良内 同上 一四度
 其他湯川(金敷)湯場(遠賀)湯山(田川)帝王(田川)板谷、門前(嘉穂)松瀬(八女)舟小屋(八女)長田(八女)中山(八女)湯ノ浦(嘉穂)梅(嘉穂)湯場(田川)神湊(宗像)今宿(糸島)吉井(糸島)大石(糸島)脇山(早良)椎原(早良)以下省略等が在る

(VI) アバチーン(Aberdeen)

その一

旅のうちの旅のこととして行方も知らぬ北緯五十七度以北の町へ、眞夜半に船から自動車にて運ばれ、町内の位置すら判明せぬ友人の故家にと急ぐ、時には何となく心淋しさを感じる。眞夜半に他人の家に泊り込むことの異常なるにまして異邦人にして初対面の身である。如何に挨拶すべきやと戸を叩く間も心秘かに煩ふ。戸を叩くと案に相異してエルダ老人は日本流に「話は明朝のことにしやう」とてあつさり片付けるさう云つて吾がストークスを提げて老人はさつさと最上階の寢室に案内して呉れる。この寢室は日本に居るチャールズ(同僚のE氏のこと)が小供の時から用ゐてゐた部屋である」

西遊夢錄

一四

五九

と只一言説明して階下に降りて行く。「先づ初めまして、兼ねてから御尊名は承つてゐます。御機嫌は如何ですか。この度はとんだ御厄介になりますか、どうか宜しく」てなことを日本同志ならば口上宜しくやり、またやらされるところであるそんな譯でこの晩は横に喋る國の有難さに、判り切つたことを縦に長たらしく喋る必要がなくなる。
 旅馴れせぬ身は前夜の疲れと船中の緊張とが一時に弛み寢臺に横はるや否や直に華胥の國に入る。
 翌朝は待ち兼ねたと云はんばかりに戸を叩いて市内を案内せんと老人は云ふ。
 案内記の讃辭ではアバチーンの町は歐洲第一の美しき市である。また花崗岩の都として何人も推賞を措まぬ都會である。どの家もこの家も悉く花崗岩で建てられて居り、煉瓦造りの